

報告

## 障害児とのダンス学習におけるコミュニケーション

佐分利育代

はじめに

ダンスは、一人一人の違いを認め合い発揮し合って、自分たちの表現という新しい文化を創り上げる活動である。鳥取聾学校の生徒達とダンス学習を共にして25年になるが、ダンスでなら耳が聞こえても聞こえなくても一緒にできるとして、普通学校の中学生や大学生との合同作品づくり、作品の見せ合いなどを行ってきた。養護学校や盲学校の子ども達ともダンスをする機会を得、近年は特に、異なる障害、障害のある子どもと障害のない子どものインクルーシブなダンスの場を考え、立ち会ってきた。そこでは享受し表現するダンスの様々な場面に様々なコミュニケーションが見られた。

### 身体感覚による原体験

聾学校の生徒達は、ダンスが「言葉ではなく身体で表現できるから良い」と言う。生徒達の原体験は身体を通してのものの方が、言語を通してのものよりも多いこと、ダンスが心的体験と直結し易いことが想像できる。次のような実験結果がある。

聾学校の中学部から高等部の女子生徒全員（ダンス経験が初めての人から5年の人まで9人）にまず、「雪」で思い浮かべる言葉を、2分間で、できるだけ沢山書きあげてもらった。多くの生徒が「こな雪」「大雪」「吹雪」と単語を並べた。

言葉の連想直後に今度は「雪」で思い浮かべることをダンスで2分間表現してもらった。へとへとになりながらも踊り続けてくれた即興表現は、感じの変化を伴った、鑑賞者にもイメージを与えるものとして踊られた。

そしてダンスの後もう一度、2分間の言葉での連想を書いてもらった。

このダンス表現前後の言語表現を比較すると、言語の連想傾向に興味ある変化があった。

すなわち、ダンス表現を経過することで連想語の数が増すだけでなく、「大雪」「粉雪」という、並べ替え可能な単語の連想から、「やわらかな雪」「つめたい風」「降り方が力強いのがだんだん弱くなる」等、構成を持つ言語の連想への質的变化がみられたことである。

しかも、その構成を持った言語の表現内容は、「強さ」や「柔らかさ」のようなイメージや、時間による感じの変化など、ダンス表現との関係を予想できるものだった。実際、生徒が行ったダン

スによる連想と比較してみても、2回目の言語での連想はダンスでの連想を追体験する形で行われたことが分かった。原体験と結びついていなかった知識としての言語が、ダンスを通して実感のある自分のことばとして連想されたものと考えられる。

聾学校の生徒達には身体感覚として出合ったことを身体感覚を通して表現することの方が言語でのそれよりも、直接的なのだと言うことが良く分かる実験だった。そして、言語化はできていなくても、豊かな「雪」に関する心的体験を持っていることも想像できるものだった。

（中には言語での連想が一言もできていない生徒が1人あったが、ダンスでは鑑賞者にもイメージを持たせる連想ができていた）

このように身体感覚として様々な事柄を感受することが、ダンスを様々な人と共有できる表現手段にしていると言える。

### 対象のリズムを捉える

10年前にNHKのドキュメンタリーとして撮っていただいた『こころのリズムに耳を澄ませて』には、鳥取聾学校生の作品づくりの様子があ

る。生徒は、中学部1年生から高等部3年生まで、ダンス経験も様々な9人（雪の実験と同じ生徒）だ。その中に、「桜の花びらが舞い散る」様子を即興的に捉えて、友だちと見せ合い話し合っている場面がある。「花びら」は、指導者である井上先生が落としている「花びらに似せた紙」である。生徒は、目で見て、あるいは身体感覚で直接「花びら」の動きを捉え、表現して、友だちに提示している。（VTR 1）

捉えているのは、「対象の本質とでも言うべき、そのものが持っているリズム」で、力や、時間や、流れ、空間と言った動きのダイナミクスとして直接に捉えているのが分かる。目と身体で対象のリズムを捉え、動いたところのリズムを表現する。音楽が聞こえない聴覚障害児のダンスがとてもしずみカルな訳はここにある。

### 身体感覚を追体験する

盲学校の子ども達の表現には、彼らが対象のエネルギーそのものを、身体を通して感じたことを追体験しているのではないかと思わせるものがある。

1999年に視覚障害児、聴覚障害児、障害のない子どもの合同でのダンス作品づくりのために、共通の原体験として鳥取砂丘に出かけた。

全盲で肢体不自由を併せ持つK君は、砂の上に

座り、砂をつかんでサラサラと自分の両脚にかけるのを楽しんだ。彼は「雨みたい」と言って繰り返した。そして、「傘さすのみたい」と言っている。K君の背中に回った先生が真似してK君の脚に砂をかけると、「気持ちいい」といい、「どんな感じ」の質問に「こうなんか、こういうの」と答え、言葉にならない気持ちよさを表現した。(VTR 2)

脚にかかる砂は、傘に降り注ぐ雨の感覚を思い起こさせる。繰り返し砂をかけて、ある意味での表現とも言えるその追体験を楽しんだ。この砂の雨と、先生がかけてくれる温かい砂の気持ちよさは、身体感覚を通して新たに出合った砂丘だったのだろうか。

このK君の砂丘での体験は、盲学校、聾学校そして普通学校の小学生の合同作品『砂丘で遊んだよ』の1シーン「Kちゃんの動きを捉えて砂になる」になった。(VTR 3)

見える子どもは目で見て、見えない子どもは先生の「Kちゃんが砂をつかんで、パラパラパラ」と伝える言葉で、Kちゃんの動きを身体感覚として捉えて砂になった。Kちゃんと他の子ども達とのコミュニケーションしながらの追体験が一つの表現になった場面と言える。

#### 対象のエネルギーを表現する

鳥取盲学校小学部での表現運動学習『春風さんになって』でのE子の発表には、風のエネルギーそのものを捉えて表現していると思わせるものがあった。(VTR 4)

全盲のE子は小学部3年生である。ダンス学習3年目のE子の表現は、柔らかさ、激しさ、そよそよと吹いていく風の様子が、左右への緩やかな移動、振る手や、踏みしめる足、はげしい回転、などの動きの中にエネルギーの変化として現れていた。エネルギーの変化に伴っていくつもの形の違う動きも現れてきていて、それらは視覚障害のない者が見ても「風」を想起させるものだった。

盲学校のダンス学習での発表は、見ている子どもを教員が実際に動かしてE子のダンスを伝える。「こんな風に回ってるよ」、「こう腕を振っているよ」、「頭を床まで下げて」と、形だけでなく速さや強さ、時間といったエネルギーの変化も伝える。見せ合いでのコミュニケーションは、教員が伝える動きの形やエネルギーと、友だちが踊る音、教員や教員に動かしてもらっている友だちの声によって膨らみを持つ。

#### 動きを伝える

ダンス学習のあらゆる場面が身体感覚でコミュニケーションしながら進んでいく。教員が伝えなくてもお互いの動きを感じながら表現する方法として、盲学校の岡部先生は大きな布を使うことを考えた。みんなで布の中に入って様々なイメージをふくら

ませた。「大きな風船が膨らむ—風船が空に舞う—海に落ちて—カバゴジラが現れた……」このお話の展開も、各場面の音楽も子どもたちが考えた。布を伝ってくる友だちの動きを感じ合いながら一つを表現しそれがまた、一人一人の表現も生み出しているようだ。(VTR 5)

#### 聾学校生と大学生の合同作品づくり

12月14日に鳥取市で開催のダンスの発表会にむけて鳥取聾学校中・高等部生と鳥大生は11月から毎週末集まって合同作品を創っている。

聾学校生は、特に今の高等部3年生は「動きで、メッセージを伝えたい」思いが強く、「愛」や「戦争反対」をテーマの作品を考え、大学生は様々なテーマに挑戦したいと「ゴミの分別」を考えていた。話し合いの結果『命りサイクルできますか』という題が決まり、大学生と聾学校生が混ざって動きの出し合いを進めている。

また、聾学校の生徒は手話を取り入れた動きを作品に入れたいと望んでいる。大学生は聾学校生に手話を習い、混合の3人グループで動きを工夫している。(VTR 6)

グループでのダンスでは、お互いが発信したり受信したりを交互に、あるいは発信と受信をほぼ同時に行いながら、呼吸を合わせ、リズムや流れを合わせて、「私たちの表現」として発表する。言葉でのコミュニケーションよりも簡単にしかも直接、身体感覚で届かせ合いながら「3人で一つの私」を創り上げてもいるようだ。

#### 終わりに

今回このような機会を得て、改めてコミュニケーションという目で障害児とのダンス学習を見つめ直してみると、ダンスの過程全てが様々な形のコミュニケーションで成り立っているとだと今更ながら思い当たった。そして様々な障害のある子ども達とのダンス学習で出合う様々な形のコミュニケーションはまた、ダンスの最も本質的な楽しさを教えてくれているようでもあった。

報告は以下のVTRによって行った。

VTR 1 「こころのリズムに耳を澄ませて」1992年 NHKより「花びらの動きを捉える」

VTR 2 鳥取盲学校小学部K君・鳥取砂丘に座って砂を握って落とす 1999年

VTR 3 作品「砂丘であそんだよ」より1999年

VTR 4 鳥取盲学校小学部学習風景「春風さんになって」2000年

VTR 5 中国・四国地区盲学校教育研究大会小学部分科会指定授業「大きな布を使って一布から生まれるストーリー」2000年

VTR 6 手話を取り入れた動きの中間発表から「元気」と「楽しい」2002年